

会議の概要(要旨)

1	会 議 名	平成29年度 第1回習志野市市民協働こども発達支援推進協議会
2	開 催 日 時	平成29年8月30日(水) 午後2時～4時
3	開 催 場 所	ゆいまーる習志野 福祉交流スペース
4	出 席 者	市民協働こども発達支援推進協議会委員 大塩委員(会長)、阿部委員(副会長)、遠藤委員、吉野委員、小藪委員、望戸委員、小野寺委員、伊藤委員、松尾委員、江川委員(総合政策課 代理)、児玉委員、江川委員(障がい福祉課)、鶴沢委員、安達委員、芹澤委員、山口委員、家弓委員、上原委員、足立委員、 こども部:竹田部長、小澤次長 事務局:ひまわり発達相談センター 内村主幹、金坂主査、染谷副主査、中村、和田傍聴人:0名
5	議 題 及び 会議の内容	1. 議事 (1)「平成27年度 こどもの発達支援に関する基礎調査」からの取り組み ホームページサイト及び広報について(発せ 内村主幹)…資料8 平成27年度 こどもの発達支援に関する基礎調査の結果(「保護者が必要な情報を得られていない」)に対して、どのように取り組めばよいのか考え、習志野市のホームページ内に新たなページを作ることに決定した。保護者の視点から必要な情報を考えるために、本協議会の市民委員(当事者の保護者でもある5名の委員)と事務局で協議を開始し、この協議する会を「きらっといっぽの会 2017」と命名した。 子育てに悩みを抱えて、どうしたら良いのか迷っている保護者の多くは、相談をすることにためらいがあるのではないかと思う。悩みに関する情報に触れることで、悩んでいるのは自分だけじゃない、ちょっと相談してみようかな、と思えるきっかけになると良い。また、多くの方に知ってもらい、理解を得て、一緒に考えてもらえる人を作っていきたい。 このサイトのバナーは、黒板に書かれた文字のデザインで、「こどものそだちをおうえんします」という文言にした。「子育て応援サイト(きらっこナビ)」のバナーの隣に設置し、「乳児期」「幼児期」「学齢期」「思春期」と、それぞれの時期に分けて情報を発信したいと考えている。「体験談」「関連情報」「関連サイトリンク」のページも開設し、保護者の体験談や習志野市の関係部署からの応援メッセージ、発達障がいに関する情報サイト等につなげていきたい。 習志野市はホームページと併せて広報も主な情報源としており、12月1日号の広報(見開き半ページ)で、発達支援に関する情報を掲載する予定。その内容については、現在ネットワーク会議委員と検討している。「オール習志野で対応していく」ということは、各部署が連携をしながら一丸となって取り組んでいくということであ

る。多くの人に見ていただき、周囲の理解者を増やしていきたい。

「きらっといっぽの会」各委員の意見・感想

【A委員】

自分の子どもは、いわゆる「グレーゾーン」で、障がいの有無がわかりにくかった。生まれた時から障がいがある子には情報があるが、途中から気づく母親は、悩んだ後にどこかの相談先にたどり着く。このサイトが、そのような母親に気づいてもらえれば良いと思う。

【B委員】

5回の話し合いは発達支援だけでなく、いろいろなことに目を向けるチャンスになった。自分の子どもは小さいころから知的障がい、自閉傾向が重く、行き場のない気持ちがずっと続いていた。また、学校に通うようになると新たに、不登校や引きこもりの相談先について困っている親の悩みを解決できないか、と考えるようになった。皆といろいろな話ができて良かった。小さい事を一つずつ、つなげていけるチャンスにしたい。

【C委員】

自分の子どもは、肢体不自由児で脳性麻痺である。1歳から療育機関に通所し、その後、特別支援学校に12年間通っていたので、普通学級との交流がなかった。

他の皆さんの経験談に驚き、そういうことをもっと他の母親たちに知ってもらいたいと思った。

自分自身の体験を振り返ると、子どもが小さいころは、自分が傷つきやすく、親戚の励ましの言葉(「そのうち歩けるようになるわよ」「かわいそうにね～」)が、一つ一つ胸に刺さり、そういうことを言われたい場所に逃げ込みたい、という気持ちで暮らしていた。

また、子どもも育てにくい子どもだったので、誰かに預けることにも抵抗があった。が、初めて、障がい児を預かってくれるサービスを利用した時は、気持ちが楽になった。最初は勇気があることだったが、その後はリフレッシュにも活用するようになった。

習志野市にはファミサポという素晴らしいシステムがある。自分は健常児の母親ではなく、障がいを持っている子どもの母親に預かってほしかった。その時はいなかったのが自分が会員となり、障害のある子を優先的に預かります、と言い、始めは、脳性まひやダウン症児等を預かった。自分が励ます側になり、自分自身に余裕が出てきたと思う。

下の子は斜視で、小さい頃はエスカレーターに乗れない、自転車に乗れない、段差がわからない等の状況があり、「何でなんだろう?」と思っていた。女の子なの

で、見た目のことでいじめられたり、「どこを見ているかわからない」と言われ、本人的には傷ついているが、周りにはわかってもらえない状況を見ると親はやきもきする。障害だけでなく、見た目の事も載せられたらと思う。普通の子でもありうることをサイトに載せていきたい。そのような子どもに悩んでいる母親のヒントになればと思う。

【D委員】

自分の子どもは先天的に筋肉に障がいがあり、知的障がいもある。生後一年経った時にわかったが、両親としては普通の子の中で過ごさせたいと思った。幼稚園、小学校では普通学級に通い、いろいろな事があったが貴重な体験ができたと思っている。

「きらっといっぽの会」では、委員一人ひとりの子どもの障がい、程度もさまざまであるが、躊躇なく話すことができた。「聞いてくれている」という安心感があり、「大変だね。そんなことがあったんだ」と共感してくれた。アドバイスがあるわけでないが、聞いてくれるだけで次の会議がとても楽しみだった。このサイトを読んで、少しでも前に踏み出せる親がいたらと思う。聞き手として共感できるよう、想像力をもってやっていきたい。

【E委員】

5人の委員とも子どもの年齢、障害の程度、育つ環境が違うが、それぞれの立場からいろいろなアイデアを出せたことが良かった。

このことはオール習志野で対応していくと良いと思うが、やり方を間違えるとたらい回しにされた、と思われる。自分たちは当事者でありながら支援者の一人でもある。最終アウトカムにもあるように、「自分らしく生きる」ということを念頭に置き、子どもも家族も支援者も「自分らしく」をモットーにやっていけたらと思う。

協議

芹澤委員：このサイトはいつから発信されるのか。

内村主幹：9月中に公開したいと考えている。完璧な状態ではないが随時必要なところは追加していきたい。

芹澤委員：各課からの応援メッセージも9月から掲載するのか。

内村主幹：関係各課から一斉にメッセージをいただくのは難しいと考えている。現在、ネットワーク会議で各委員に伝え、協議をしている段階である。状況に応じて吟味をしながら載せていきたい。

大塩会長：9月中に立ち上げ、必要に応じて追加・更新し、年内にある程度の形ができると良いのではないかな。

児玉委員：保護者の体験談はいつ頃掲載するのか。

内村主幹：現在、準備中である。多くの方々から体験談をいただくことで、「私と同じ思いをしていたんだな」、「こういう方がいるのか」と様々な見方ができると思う。まずは、きらっといっぽの会の皆さんに書いてもらいたいと思っている。

大塩会長：5名の委員の方からの話はインパクトがあった。「話せてよかった」「知ってよかった」「そういう会があって良かった」と良かった点を感じられた。そういう内容を掲載するだけでも共感を得ることができ、反響が帰ってくると思う。まずは一歩踏み出してみると良いのではないかな。

鵜沢委員：各幼稚園、保育所、こども園には、いろいろな事情を抱えている幼児、保護者がいる。その方たちの力になれるような有益な情報を載せていきたい。応援メッセージは保護者に寄り添えるような、元気になれるような内容をこれから考えていきたい。

安達委員：「子育て応援サイト(きらっこナビ)」について、「こういう情報を知らなかった」という声をよく聞く。このサイトができたことを、どうやって周知すれば多くの人に認知してもらえるのかが課題だと思う。

家弓委員：療セを利用している保護者は、ある程度支援の必要性を認識している。利用する前の気持ちから現在にかけての体験談が掲載できると良いと思う。また、就学などの悩みについての体験談や情報が出せると良い。

摂食指導についても、誤学習をしてから修正するのは大変なので、早期から口の周りを刺激する重要性を理解してもらう必要がある。そのことについての体験談を載せても良いと思う。

望戸委員：子育てで悩んでいる人がこのサイトからつながって行けると良い。習志野市のサイトから県の相談機関の情報紹介ができたり、県立特別支援学校のホームページにもつながって行けると良い。

上原委員：就学に対する情報を積極的に載せていきたい。どのようなアプローチが必要で、どこに相談したら良いか、保護者の悩み、思いに対応できる情報を発信していきたい。

芹澤委員：放課後児童会は年齢、性別、障がいも様々な児が利用しており、ダイバシティとインクルージョンが混在している。この取組みは素晴らしいと思う。現場の雰囲気伝えていきたい。

足立委員：「きらっといっぽの会」の名前が素敵だなと思った。市のホームページに掲載されるということは「市が管理している」ということで、見る人の安心感につながると思う。先輩保護者の体験談について、同じ悩みを持っている方が直接話を聞きたいと思った時のために、連絡先なども載ると良いと思った。

児玉委員：健康支援課で実施している節目の健診において「すぐに相談したい」と思

っている保護者は保健師としてアプローチしやすい。拒否的になる保護者に対しては、保護者自身が悩んでいることを理解していても、支援者としての思いを上手く伝えられないジレンマがある。このホームページを良いタイミングで紹介し、相談に対する障壁をなくしていけると良い。5人の委員の話を聞き、こういう部分から保護者の気持ちを解いて行けるのではないかと思った。

奥山委員：総合政策課は市全体の計画を扱っている。関連情報が充実すると、サイトを見た後の相談先がわかりやすいのではないか。このホームページはスマートフォンになるとどのような形態になるのか。

内村主幹：きらっこナビのスマートフォン版と同じように、少し形態が変わる。

奥山委員：若い母は、よくスマートフォンを見ているようなので、字が大きく見られるようになると良いと思う。

江川委員：障がい分野は、対象者一人一人の事情、背景が違うという特徴がある。障がいのある人もない人も、というだけでなく、障がいのある人の中でも、個々の状況に応じて対応していく必要がある。世代間によっても異なり、後発的に障がいを持つ人もいる。状況の違いを超えて、それぞれの方々が発信をすることで、事情の違う方々の救いとなる一つのスタートになると思う。

大塩会長：10月28日に福祉ふれあいまつりがある。かつて、いろいろな障がいのある方とパネルディスカッションのような形で発表したことがあり、それが縦横のつながり、ネットワークに結びつくと感じたことがあった。市民対象というだけでなく、障がいを持っている者同士が理解することが必要である。行政として具体的に取り組める機会があると思うので、よろしく願いたい。

小藪委員：縦横いろいろな線を総合的にまとめた意見を市の方からPRしてもらえるのではないかと思う。自分は市民の目線で広報を広めていきたい。

松尾委員：「きらっといっぽの会 2017」はすばらしいネーミング。保護者の目線に立った「こんなことあるある」のページは大切だと思う。母としての気持ちに同調できる内容は「一人じゃない」という不安解消になる。さらに、今の現状からさらに先の事(思春期にはこういった課題があったが、成人期になった今は、こうやって社会の中でしっかり働いている、こんな形で地域の中で活躍している等)が載せられると、「こうやって自立できるんだ」「親もこうやって自分の時間が持てるんだ」という将来の安心感につながる。将来が安心できる材料を投げかける情報に協力していきたい。

(2) ネットワーク会議の報告(小坂会長)

ネットワーク会議は16名の委員で構成されており、本協議会の下部組織として

連携を保ちながら、発達支援施策に関する事業と関係部局との連携について話し合いを行っている。発達支援に関する課題や取組みについて協議をしていくことを目的とし、今年度はすでに2回実施した。

本会議の特色である、発達支援が必要な子どもたちに関わる3部署(教育委員会、健康福祉部、こども部)の職員が一同に会して具体的な協議ができるという長所を生かし、現場に即したテーマでグループワークを行った。第1回の会議では、発達支援が必要な子が増えている中での現状の取り組み、課題、苦慮していることについて協議を行った。各立場の委員からの共通した話題として、保護者に寄り添い、保護者とともに考える支援のあり方が課題として挙げられた。

2回目の会議にて、「保護者とともに寄り添う支援」テーマで、各委員から提出された事例をもとに、就学後の児に対する支援についてグループワークを行った。ここでは、様々な支援機関の中から核となる機関を決めることの必要性(たらい回しにすることなく、保護者を支えていくこと)について話し合った。それぞれの委員の視点から意見を出し合うことにより、保護者支援に関する新たな気づき、各機関の連携について共通理解を図る良い機会となった。

第3回会議は9月27日に実施し、引き続き「保護者とともに寄り添う支援」というテーマで、就学前の児童についての事例のグループワークを行う予定。また、第4回、第5回の会議では、今後、市として新たに取り組んでいく必要性があることについて話し合う予定である。

今後、3部署が一丸となって取り組むべき発達支援の施策の方向性について、具体的に話し合ったり、連携を深めていけるよう会議を進めていきたい。

(3)平成29年度単年度戦略

各課の取り組みについての報告(資料7)

児玉委員:切れ目のない支援として産後に力を入れたいと考え、平成28年度より産後ケア事業と産後サポート電話相談を実施している。

最近はお産後、早期に退院するが、その後に産後うつが起りやすい。産後ケア事業とは、核家族化が進み、里帰り先がないとか、高齢出産で産後うつになる可能性が高い方、支援を希望している方、支援が必要と思われる方に対し、宿泊していただきながらサポートをする事業である。平成29年1月～済生会習志野病院にて実施している。

産後サポート電話相談は、新生児訪問をしなかった方に対し、産後うつやいろいろなトラブルが起こってくる時期に助産師が電話連絡をする事業である。

安達委員:今年度の機構改革にて、発せ、療せ、児童育成課が移管され、こども部

は組織が大きくなった。子育て支援コンシェルジュは、これまでは各こどもセンターに配置していたが、相談体制を強化するため、新たに3名の子育て支援コンシェルジュを子育て支援課窓口配置した。

地域の子育て支援は、18歳未満の子ども及び保護者、妊娠している方を対象としている。妊娠、出産等の手続き後、こどもセンターやきらっこルームなどの新規に遊べる場所の案内をしている。出生手続きは父親が来ることが多く、父に子育て支援の情報が伝えられるのはこの時期しかない。この制度を周知し、子育てのよろず相談の場所として気軽に立ち寄ってほしい。

遠藤委員：広報で子育て支援コンシェルジュを知り、とても良いと思っていた。子育て支援の対象年齢は18歳まで、ということであるが、就学の相談等については、教育委員会とどのようにつながるのか、就学の問題も受けてもらえるのか。

安達委員：子育て支援コンシェルジュが、家庭児童相談室、母子保健等の関係部署に声をかけ、話し合っていく。

遠藤委員：そういう方の存在はとても大きい。つないでもらえるのはありがたい。

大塩会長：単年度戦略(資料7)の赤字で記載されたところが新たに加わった部分である。1ページ目の「ベースライン調査」は平成27年度に行った基礎調査のことである。この基礎調査結果を基に市民協働のホームページサイトを立ち上げた。2ページ目は文言の変更箇所、4ページ目は「福祉のしおり」、9ページ目には発達支援基礎研修公開講座「シンポジウム」のことが記載されている。参考にしてほしい。

(4)「子どもたちの学び合いと育ち合いを考えるシンポジウム」についての振り返り(意見交換)(資料9)

山口委員：当日の来場者は1,118名。子どもとスタッフを除くと957名であった。

アンケートの記述部分においては、「障がいを持つ子どもとともに学べる環境づくりが大切」、「周りの子をどう育てるかがとても大事」、「障がいの有無に関わらず、子どもは未来の宝物。地域住民みんなで育てていきたい」との記載があった。パネルディスカッションについては、「時間が短かった」との記載があり、反省点である。

また、「ひまわりの花が感動的だった」という記述も多かった。「一体感を持ってシンポジウムを伝えたい」という遠藤委員の発案であり、「きらっこといっぽの会2017」の5人の委員が打ち合わせをしながら、折り紙を折るなど、手伝っていただいた。きれいなものが出来上がり、大きな感動を生んだ。参加された委員の方から、御意見等をいただけるとありがたい。

阿部委員:事業としては成功だったと思う。パネルディスカッションでは一言しか言えなかったが、ともに生きていく社会が当たり前であることが一番だと思う。留学経験者からは、日本は海外と比べて遅れているが、支援学校や支援学級の教材開発は素晴らしいと評価していただいている。

インクルーシブ、インクルージョンということを学校現場で推進していくことにより、学びの場を選べる時代にもなったが、その分悩みは増えた。それをこれからどうサポートしていくのか。オール習志野、チーム習志野で、一人一人様々な生き方、学びを認め、お子さんに合わせて一人一人を支援していけると良い。

望戸委員:良い企画だったと思う。「みんなの学校」は、学校教員たちの中でもう1回見たいとの声が多く、今年度、別の会場でも上映会を実施した。会場に入りきれないぐらいたくさんの教員が集まった。とても話題になっている映画である。習志野市が映画の上映と併せて木村先生を呼んで基調講演ができたことは素晴らしい。地域社会で子どもを育てていくという趣旨がよく伝わった。映画だけだと「みんな一緒に良い」と思いがちであるが、基調講演をすることで正しく理解してもらえた。

伊藤委員:ひまわりの花は、7月半ばから、1か月もない期間の中で準備した。ちょっとしたアイデアで皆の力が集結し、会場内にひまわりの花がたくさんあふれたのを見たことで、新しいことが何かできるんじゃないか、と思わされた一日だった。

大塩会長:思いがあればこそつながる。願いをこめられたものがつながるのだと思う。

児玉委員:息子とその友だちを連れて行った。中1、小6の子も内容について共感できており、「こういう社会が普通になれば良い」という言葉を引用した感想を書いていた。また、ひまわりの花が机のラバーシートに入っていた。世代に関係なく伝わるものは伝わる。映画の3D、4D等が開発されているが、立体的な物のすばらしさを感じた。

遠藤委員:息子の送迎の関係で、最後まで話を聞くことができなかったが、ひまわりの花をつけたまま駅に帰る人もいた。自分の発案に他の委員の皆さんが賛同してくれて、発せで折り紙を購入してもらった。自分一人の力ではなく、皆さんの力を合わせることで実現できた。このような繋がりが、これからも自分たちができないことをチャレンジしていく力になるかなと思った。

イギリスの特別支援教育の講演会に行った。仕事の関係でイギリスに一年間滞在した方の話によると、イギリスは特別支援教育も実施しているが、インクルーシブ教育(皆と一緒にいること)が当たり前となっている社会である。しかし、その

中で個人の能力が伸びるかということについては疑問に思ったとのことであった。イギリスではインクルーシブ教育の部分と、その子を育ててほしい部分(親の思いとして)との兼ね合いが難しかった。帰国後、日本にはこれほど良い教材があり、充実したマンツーマンの授業があるのだと感じたとのことであった。海外が進んでいるということではない。親としては、トップクラスの特別支援教育の中に自分の子どもを入れたいという気持ちが強い。特別支援は大切なことであり、その子にとってのトップクラスの内容で充実させたい。ごちゃまぜになっていることが当たり前の世界を、親としても支援者としても目指していければ良いと思う。

小澤次長:とてもたくさんの人に来てもらって良かった。ひまわりの花を会場の皆が付けてくれて、ありがたかった。参加した人は関心のある人で、「世の中は変わっていかなくてはならない」「変わっていくことは素晴らしい」と感じている方なのではないかと思う。いろいろな個性を持つ方たちが当たり前のように傍にいて、それがうれしいことと感じられる社会になるのはそんな先のことではないと思っている。去年、ワークショップで提案されたホームページのことが今日の会議であつという間に実現することに驚いている。一步踏み出すことは知ることの始まり。知ることが、また新たなことにつながる。

大塩会長:多数の人が参加したということは、それだけ関心が高いということであり、映画「みんなの学校」を見た方は、共感を得て良いものをたくさん学び、考えさせられたこともあると思う。習志野市は、たくさん先生方が熱心に取り組んでいる。特別支援教育、通常学級と支援学級との交流も盛んであり、成長した姿を見せる子どもたちもたくさんいる。地道に勉強している教員もたくさんおり、開かれた学校づくりに取り組んでいる学校もたくさんある。近隣と比べても、これほど公開研究会に一生懸命取り組んでいる学校の多い市は無いと思う。習志野市の良さを見ながら、映画の良いところも具現化し、12月の協議会、広報やホームページの作成に繋がって行けると良い。

大空小学校の全校生徒数は220名。16学級のうち通常学級は7学級、特別支援学級は9学級である。担任の配置は通常学級40人で1学級、41人で2学級、特別支援学級は8人で1担任、10人で2担任となる。大空小学校も特別支援学級の数、生徒数に応じた教員数が配置されている。

習志野はオール習志野として、皆が協力し、協議会等を充実させて施策に反映していけると良いと思う。これから、「きらっといっぽの会 2017」と事務局で進めて行ってほしい。こういう会を運営していくことは時間も労力も必要だが、それなりの効果や成果が出れば、倍になって色々な所に影響を及ぼす。困難なこともあるだろうが、それらをはねのけてホームページを立ち上げて実現していくことに、こ

の会の価値がある。行政と連携を図りながら、どんどん情報を提供してほしい。

V. 閉会

事務連絡(事務局)

第2回協議会は12月26日(火)午後2時～ ゆいまーる習志野 福祉交流スペースにて実施する予定。内容については、ホームページサイトについての状況報告と意見をいただく予定。評価部会においては、発セの事業についての評価を予定している。